五、天国と地獄

（ページ「行こう行こう彼の岸へ」参照）

以前、守護霊に連れて行かれたことがあるんですが、大きな岩があって、この岩陰の隅の方にしゃがんでジーッとしている人がいるんですよ。何やってるんだろうと観ていたんですが、苔生した処に唯ジーッとしているだけ――。地獄界ですね。

まぁ、この辺はまだ良い方ですよ。

どうしてそんな事をやっているのか、何故、自分がそんな処にいるのか――その人が分かるまで、気が付くまで、そこにいる。何年掛かるか分からないですよ。そうなってはどうにもならない。

「そんな事があるもんか」と言う人、いるけれども、本当にあるんですね。

そういう（地獄の）人に、「こうですよ」と言っても、中々分からない。自分がこの世にいた時に造りだした、そういう意識で凝り固まっているからなんですよ。

自分が、「あー、これはいけない。何故、私はこんな事をしていたのだろう」と気

が付いた時に、その人の心の中にスーッと光が射して来る――そういう世界。

まぁ、これは一つの例として、そういう処が本当にあるということです。

ですから、私達はそんな処に行くことはありませんよ。

私達は、明るい、本当に素晴らしい処から出て来たんですよ。

まぁ、この世的に説明すると、若草色のような柔らかい芝生があって、今この会場ような明るさではなくて、物凄く明るい処ですね。

私がそういう処に、肉体から抜け出して行って、スーッと自分の肉体に戻って来た。

そうしたら、守護霊が出て来て、

「あなたは今、素晴らしい処に行った。何か気が付きませんでしたか？」

「はい、芝生があって、とても明るく美しい処でした」

「そうではない。もっと大事な事である」

――さっぱり分からない。注意意識が足らない。一所懸命に考えた、

「あっ、そういえば、影が無かった」

「よく分かったね。それが分かればよろしい」

と、そう言われた。あの世は影の無い世界、明るい世界。当然そうですね、心の中には影が無いですから――。

影があるのは、この世と地獄の世界だけなんですね。

みんな、こういう素晴らしい処から出て来たんですよ。ここ（影の無い世界）に帰れるようにならなければいけないですね。

一九八〇年五月